

Società Rossiniana Giapponese

日本ロッシーニ協会

ROSSINI パリの煌きとエスプリの中で



2015年3月29日 14時開演JTアートホール アフィニス

主催：日本ロッシーニ協会

後援：イタリア文化会館

後援：公益財団法人 日伊協会

マネージメント：ミリオンコンサート協会

ROSSINI パリの煌きとエスプリの中で

PROGRAMMA

出演 山口 佳子(ソプラノ) 富岡 明子(メゾソプラノ) 中井 亮一(テノール)
金井 紀子(ピアノ) 水谷 彰良(解説)

《ランスへの旅(*Il viaggio a Reims*)》(1825年)より

フォルヴィル伯爵夫人のアリア〈ああ！私が出発したいのです〉
Aria Contessa di Folleville 〈*Partir, oh ciel! Desio*〉 山口佳子

シェーナ、メリベア侯爵夫人とリーベンスコフ伯爵の二重唱〈気高き魂を、おお神よ！〉
Scena e duetto Melibea - Conte di Libenskof 〈*D'alma celeste, oh Dio!*〉 富岡明子／中井亮一

レチタティーヴォ、コリンナと騎士ベルフィオーレの二重唱〈かのお方の神々しいお姿には〉
Recitativo e duetto Corinna e Cavaliere 〈*Nel suo divin semblante*〉 山口佳子／中井亮一

カンタータ 《ジョヴァンナ・ダルコ(*Giovanna d'Arco*)》(1832年)
Cantata 〈*Giovanna d'Arco*〉 富岡明子

—— * —— * —— * —— * ——

歌曲 《ゾラの歌(*Chanson de Zora*)》 山口佳子

歌曲 《見上げた洒落女(*La grande coquette*)》 山口佳子

《ギヨーム・テル(*Guillaume Tell*)》(1829年)より

アルノールのレシタティブとエール〈先祖伝来の住処よ〉
Récitatif, Air Arnold 〈*Asile héréditaire*〉 中井亮一

セーヌと、マティルデのエール〈私たちの愛には、もう希望がありません〉
Scène et Air Mathilde 〈*Pour notre amour plus d'espérance*〉 山口佳子／中井亮一

《オリー伯爵(*Le Comte Ory*)》(1828年)より

オリー伯爵、イゾリエ、女伯爵アデルの三重唱〈この暗い夜の助けで〉
Trio [Comte, Isolier, Comtesse] 〈*A la faveur de cette nuit obscure*〉 山口佳子／富岡明子／中井亮一

以上、ピアノ 金井紀子

出演者プロフィール

山口佳子 Yamaguchi Yoshiko (Soprano)



東京藝術大学声楽科卒業、同大学院修了。2005年藤原歌劇団公演《ラ・チェネレントラ》クロリンダ役でデビュー後、イタリアに留学。ロッシーニ音楽祭《ランスへの旅》の他、《セビリヤの理髪師》《ラ・ボエーム》など欧州各地でのオペラ公演に参加、2013年にはイタリア・トリエステ歌劇場《カルメン》ミカエラ役で出演。2009年に帰国後は国内でも、オペラ《椿姫》《こうもり》《ドン・ジョヴァンニ》《コジ・ファン・トゥッテ》《愛の妙薬》《マノン》《フィガロの結婚》《アラベラ》等の主要な役を演じ、様々なコンサートや《メサイヤ》《第九》等のソリストとしても各地の公演で活躍中。藤原歌劇団団員。日本ロッシーニ協会会員。CD 日本歌曲集《樋口一葉～恋の和歌～》発売中。公式ブログ <http://yohhin33.at.webry.info/>

富岡 明子 Tomioka Akiko (Mezzosoprano)



東京芸術大学卒業、同大学院修了。在学中に安宅賞受賞。ローム音楽財団奨学生としてイタリア・パルマ音楽院に学び、審査員全員一致の首席にて学位取得。2011年日本音楽コンクール2位をはじめ、フラビアーノ・ラボー国際音楽コンクール2位など国内外で受賞を重ねる。《フィガロの結婚》ケルビーノ役を皮切りに、パルマ歌劇場《試金石（抜粋）》やペーザロ・ロッシーニ音楽祭《ランスへの旅》、また小澤征爾音楽塾やサイトウキネンフェスティバルにおいて《セビリヤの理髪師》に出演。2010年東京フィル定期《エレミヤ》や、2012年同定期、巨匠アルベルト・ゼッダと共演した《フォークソングス》では、NHK-FMでの放送と併せて高い評価を得た。2015年4月東京フィル定期《パールギュント》にアニトラ役で出演予定。二期会会員。

中井 亮一 Nakai Ryoichi (Tenore)



名古屋芸術大学首席卒業、同大学院修了。08年スカラ座音楽院オペラ研修所修了。05年よりミラノに留学。ヴェネツィア国際音楽祭、フェニーチェ歌劇場(ロッシーニ・ガラ)などでオペラやコンサートに出演。07年にはペーザロ Rossini Opera Festival 若者公演《ランスへの旅》にベルフィオーレ役で出演、l'opera 誌ほかで好評を得る。帰国後は《夢遊病の女》(新国立劇場)、《愛の妙薬》(銀座/浜松)、《椿姫》(広島/静岡)、《蝶々夫人》(京都南座)、《ファルスタッフ》(A.Zedda 指揮・東京文化会館)など20以上のオペラに出演。ロッシーニ作品は《結婚手形》《タンクレーディ》、《セビリヤの理髪師》、《マオメットII世》《スターバト・マーテル》《小荘厳ミサ曲》などに出演。名古屋芸術大学講師。日本ロッシーニ協会会員。藤原歌劇団団員。

金井 紀子 Kanai Noriko (Piano)



武蔵野音楽大学ピアノ科卒業、同大学専攻科修了。声楽のアンサンブルピアニストとしての実績は長期に及び、オペラの分野ではコレペティートルとして二期会、藤原歌劇団、東京室内歌劇場、東京オペラプロデュース、日本オペレッタ協会、新国立劇場小劇場などで活躍。1985、87、92年にはロッシーニのピアノ作品を紹介するリサイタルで話題を集めた。1988～89年文化庁芸術家在外研修員としてミラーノのスカラ座に留学し、イタリアのテレビ番組「リリカ・イン・サロット」のレギュラーピアニストを務め、T.ファッブリチーニ、M.レアーレなどのリサイタル伴奏も務める。日本ロッシーニ協会事務局長。昭和音楽大学名誉教授。

水谷 彰良 Mizutani Akira (解説)



1957年東京生まれ。音楽・オペラ研究者。日本ロッシーニ協会会長。フェリス女学院大学オープンカレッジ講師。著書：『プリマ・ドンナの歴史』(全2巻、東京書籍)、『ロッシーニと料理』(透土社)、『消えたオペラ譜』『サリエーリ』『イタリア・オペラ史』(共に音楽之友社)。共著：『魅惑のオペラ』(小学館。全30巻)、『ジェンダー史叢書・第4巻 視覚表象と音楽』(明石書店)、『ローマ 外国人芸術家たちの都』(『西洋近代の都市と芸術』第1巻、竹林舎)ほか多数。『サリエーリ』で第27回マルコ・ポーロ賞を受賞。多数の論文・論考を日本ロッシーニ協会紀要『ロッシニアーナ』と協会ホームページに掲載。<http://societarossiniana.jp/>

《ランスへの旅(*Il viaggio a Reims*)》(1825年)

題名 ランスへの旅、または金の百合亭 (*Il viaggio a Reims, ossia l'Albergo del Giglio d'oro*)

1幕のドラマ・ジョコーゾ

台本 ルイージ・パローキ (Luigi Balochi, 1766-1832)

初演 1825年6月19日 パリ、王立イタリア劇場 (サル・ルーヴォア)

メモ 1824年に活動の場をパリに移したロッシーニが新国王シャルル10世の戴冠を祝って作曲した喜歌劇(1幕のドラマ・ジョコーゾ。但し、ロッシーニはカンタータと位置づける)。初演は1825年6月19日にシャルル10世が臨席して王立イタリア劇場で行われ、大成功を収めた。戴冠祝いの機会作品のためロッシーニは4回の上演で楽譜を引き揚げ、後日半数の楽曲を《オリー伯爵》に転用した。その結果《ランスへの旅》は1984年に復元蘇演されるまで「幻のオペラ」となっていた。

◎フォルヴィル伯爵夫人のアリア(ああ！私は出発したいのです(*Partir, oh ciel! Desio*))

馬車の転覆を知り、荷物が届かぬショックで失神したフォルヴィル伯爵夫人が目覚めて歌うアリア(第2曲)。「衣装がないと出発できない」と大げさに嘆くアンダンテの前半部と、帽子が届いた喜びを歌うアレグロの後半部からなる、ベルカントの歌の技巧を駆使した華麗な楽曲。初演歌手ラウラ・チンティ[生名ロール・サンティ・モンタラン](1801-63)は7歳でパリ音楽院に入学し、15歳を目前に王立イタリア劇場にデビューして1821年にプリマ・ドンナに昇格した逸材(ロッシーニの《コリントスの包圍》《モイーズ》《オリー伯爵》《ギョーム・テル》)の女性主役も彼女のために書かれた)。

歌詞：ああ、私は出発したいのです。でも、もう出発できません。名誉が、祖国が私にそれを禁じるのです。ああ、どう説明すればいいのでしょうか、私の心の苦しみを。女性ならこの苦しみが判るはず、こんなひどい経験は初めてです。[帽子の入った箱が届く]ああ、これは！なんという驚き！自分の眼が信じられない。可愛い帽子！お前だけ助かったのね。お前が私の苦しみを止めてくれるわ。ああ神様、感謝いたします！私の願いを聞いてくれました。私の魂はいつまでも、この恩寵に感謝し続けます。

◎シェーナ(私にどんな咎があるのです？(*Di che son reo?*))、メリベアー侯爵夫人とリーベンスコフ伯爵の二重唱(気高き魂を、おお神よ！(*D'alma celeste, oh Dio!*))

メリベアー侯爵夫人とリーベンスコフ伯爵の二重唱(第8曲)。冒頭シェーナで伯爵が「私にどんな咎があるのです？」と問うと、メリベアーは「卑しい疑いです」と答え、行き過ぎた愛情を詫びた伯爵は跪いて許しを請う。続く二重唱は急～緩～急の三部分からなり、伯爵の情熱的な求愛をメリベアーが拒む第一部分(4/4拍子)、心が揺れてメリベアーが陥落する三拍子の第二部分(3/4拍子)と続く。愛の喜びを歌い上げるアレグロのカバレッタ(2/4拍子)では、「Ah! no」「non ha」「no, no」「ancor」の短い言葉のやりとりが高揚する感情を官能的に表現する。

歌詞：[以下、二重唱より] [リーベンスコフ] 気高き魂を、おお神よ！私の愚かな情熱で乱してしまいました。
[メリベアー] あなたはまだ、清らかな愛の本質を知りません。 [リーベンスコフ] 私は後悔しています。
[メリベアー] その後悔の言葉を、私の心は信じません。ひどく厳しい言葉に、希望と不安にかられているわ。私の心も高鳴っています！ [リーベンスコフ] ひどく厳しい言葉！希望と不安にかられ、私の心が高鳴る！
[メリベアー/リーベンスコフ] ああ！これ以上に愛しい高鳴りは初めてだ。ああ、比類のない喜び！ああ、幸運な熱情！

◎レチタティーヴォ(やっと女神が一人のところを見つけた(*Sola ritrovo alfin la bella Dea*))、コリンナと騎士ベルフィオーレの二重唱(かのお方の神々しいお姿には(*Nel suo divin sembiante*))

即興詩人コリンナが独りであるのを見た騎士ベルフィオーレが齒の浮くような言葉で言い寄るレチタティーヴォと、無神経な求愛をコリンナが侮辱と受け止め腹をたてる二重唱(第5曲)。8分の6拍子、アンダンティーノの開始部、カデンツァを経ての4分の4拍子、アレグロの経過部と続き、4分の2拍子、アレグレットのカバレッタに至る。自信たっぷりの色男ベルフィオーレと真面目なコリンナは、同じ旋律を共有しながらも気持ちがすれ違ったまま進行する。

歌詞：[レチタティーヴォ] [ベルフィオーレ] やっと女神が一人のところを見つけた。目配せしておいたので…さっすく取り掛かろう。彼女も他の女たちと同様、私の攻撃に陥落するだろう…ああ、あなたはアポロンに愛されし娘。その崇高な思いを邪魔するのをお許しください。[コリンナ] ごめんなさい、私には判りませんわ、なぜあなたが私に…[以下、二重唱の略記] [ベルフィオーレ] かのお方の神々しいお姿には、大いなる美が輝いています。その美が最も熱い情熱をかきたてます。[コリンナ] ああ！どこにそんな美の女神が隠れておいでかしら。[ベルフィオーレ] あなたに拒まれたら、私はここで死にます。[コリンナ] 去りなさい、人々を呼びますよ。ああ、なんとという勘違いでしょう。[ベルフィオーレ] 厳しい態度はみせかけさ。美女はみなそうして抗うもの。今日闘って明日屈服すれば、自分の名誉が保たれると思っているのさ。

カンタータ《ジョヴァンナ・ダルコ(Giovanna d'Arco)》(1832年)

百年戦争の末期、神のお告げで祖国フランスの救済を決意した羊飼いの娘ジャンヌ・ダルク(Jeanne d'Arc, 1412-31. オルレアン少女)の史実を基に、ジャンヌが故郷に別れを告げて戦地に赴くまでを描くカンタータ(作詞者不詳)。1832年に作曲して愛人オランプ・ペリシエに献呈し、初演は1859年4月1日、ロッシーニの催した音楽の夕べで行われた。曲はホ長調、8分の6拍子、アンダンティーノの50小節の序奏に続く無伴奏のレチタティーヴォで始まり、静かな中にも劇的な感情の盛り上がりを経て、「野よ、森よ、さようなら(o campi o selve addio)」と別れを告げる。抒情的なアリアは変イ長調、8分の6拍子、アンダンティーノ・グラツィオーゾ。「ああ、私の母よ(O mia madre)」との呼びかけで始まり、私を探すあなたのもとに功の知らせがもたらされるでしょう、と歌われる。続いて死の覚悟を固めるレチタティーヴォ、決然と王に勝利を約束するホ長調、4分の4拍子、マエストロの経過部を経て歓喜に満ちた輝かしいカバレッタ「喜びが心から心へと走る(Corre la gioia di core in core)」に突入し、「国王万歳！勝利は我と共にあり」と力強く宣言して閉じられる。



ジャンヌ・ダルク

歌詞：夜、すべてが眠りについている。私は独り目覚め、駿馬が来るのを、ラッパが鳴のを待っている。耳を澄ませても何も聞こえない。ただ水の音と風のささやきがあるのみ。すべてが打ちひしがれている。もはや敗北したかのように。ああ、祖国！王よ！新たな助けが参ります。全能の神が、羊飼いの娘を奮い立たせたのです。ああ、愛しいわが故郷、愛しい家族、野よ、森よ、さようなら。ああ、母よ、あなたは娘を探すでしょう。でも誰も答えぬでしょう。でも功の知らせがもたらされ、それが涙の慰めとなり、すべての母親が、すべてのフランス人が私の母を羨むことでしょう。それでもあなたは泣くのです。ああ！不意に東の空に光がきらめく。それは私の幻。空が電光で満たされる。それは死の天使のしるし、私は召されに参ります。ああ、あなたの眼から出た炎が私を燃え上がらせませす。早く剣を…戦いに行きましょう。国王万歳！勝利は我と共にあり。乙女が戦場で屈強な兵士を導き、羊が獅子の群れに突進する。もはや逃げ場はない。喜びが心から心へと走る。でも驚きの中にあって慎ましい娘は問われる、王を救ったお前は誰なのか？ああ、神の思し召しで乙女が勝ったのです。国王万歳！勝利は我と共にあり。

———— * ———— * ———— * ———— * ————

歌曲《ゾラの歌、可愛いボヘミア娘(Chanson de Zora, La Petite Bohémienne)》

1855年パリに再移住したロッシーニが晩年にまとめた曲集《老いの過ち(Péchés de vieillesse)》(1857~68年)の第2集〈フランス語のアルバム(Album français)〉第5曲。作詞はエミール・デシャン(Émile Deschamps, 1791-1871)。微笑み、歌い、踊りながら町から町へと流れ歩くジブシー娘の歌。編成は歌[筆写譜はメゾソプラノ]とピアノ。変ロ短調～変ロ長調、8分の6拍子、アレグレット。短調と長調の対照的な二つの部分から成り、長調の部分はオペレッタ風の洒落た味わいをもつ。

歌詞：野の民、それとも山の民か、私は自分がどこから来て、どこに行くのか知りません。ああ、私は皆さんのブルターニュでも、時代に、道に、運に恵まれません。でも皆さんを楽しませ、稼がなければなりません。そしてゾラは微笑み、踊り、歌います。ああ！…毎日みじめな生活を送る私は、歌って笑って俺たちを楽しませろ、って言われるわ。そんなとき一人で泣くのはつらい。でも私には父親代わりの神さまがいる。「希望を持って」と言ってくれる神さまが。

歌曲《見上げた洒落女 (*La grande coquette*)》(ポンパドゥールのアリエッタ[Ariette Pompadour])

前曲と同じ《老いの過ち》第2集〈フランス語のアルバム〉の第3曲。作詞はエミリアン・パシーニ (Émilien Pacini, 1811-98)。宮廷の伊達男たちを手玉にとる洒落女の自慢の歌で、いかにもフランス風の小粋な音楽だが、原曲はロッシェーニがフィレンツェ時代 (1848~54年) にメタスタージオのテキスト《黙って嘆こう (*Mi lagnerò tacendo*)》を用いて作曲し、フランス語の歌詞はエミリアン・パシーニが曲想に合わせて作詞した (パシーニのテキストに1862年1月29日の日付あり)。編成は歌 [筆写譜はソプラノ] とピアノ。ニ長調、4分の2拍子、アレグレット。

歌詞：洒落女 (コケット) の鑑は、宮廷のメヌエットのさなか、その豪華な装いで男を虜にするばかり。私に夢になり、心は愛に捉われる。きっと私は、ある日ポンパドゥールの気を揉ませたに違いないわ。心地よい酔酌のなかで一人ならずの侯爵が私に甘い言葉をかけても、私はぜんぶ無視してやるわ。誰もがむなしく私に懇願し、跪いて私を崇めると誓う。私はただ、人に憧れられ、ため息をつかれたいだけ。私に起こる恋心、燃える狂おしい思いなんて、私にとってお笑い草よ。…

《ギヨーム・テル (*Guillaume Tell*)》(1829年)

題名 ギヨーム・テル (*Guillaume Tell*) 4幕のオペラ
台本 ヴィクトル=ジョゼフ=エティエンヌ・ド・ジュイ (Victor-Joseph Étienne de Jouy, 1764-1846) 及びイポリート=ルイ=フロラン・ビス (Hippolyte-Louis-Florent Bis, 1789-1855)
初演 1829年8月3日、パリ、オペラ座 [王立音楽アカデミー劇場 (サル・ル・ペルティエ)]
メモ ロッシェーニ最後のオペラであると共にグランド・オペラの先駆けをなす重要作品。ドイツの劇作家・詩人シラーの劇台本『ヴィルヘルム・テル』を原作に、スイス・アルプス地方の民衆が自治と独立を獲得するまでを壮大に描く。台本はエティエンヌ・ド・ジュイとイポリート・ビスの2人がシラー劇のフランス語訳に基づいて作成し、1829年8月3日にパリのオペラ座で行なわれた初演は大成功を収めた。ロッシェーニがオペラ人生の最後に到達した、前人未至の高い境地が見て取れ、その功績を称えてシャルル10世からレジオン・ドヌール勲章シュヴァリエ章を授与された。



◎アルノールのレシタティブ〈私を見捨てないでくれ、復讐の希望よ! (*Ne m'abandonne point, espoir de la vengeance!*)〉とエール〈先祖伝来の住処よ (*Asile héréditaire*)〉

第4幕冒頭、荒れ果てた父メルクタールの家 (第18曲)。暗く激しい序奏に続いてアルノールが亡き父に思いを馳せ、廃墟となった家に入るのを逡巡する (以上、レシタティブ)。続くエール [アリア] は、変ホ長調、8分の6拍子、アンダンティーノの短い前奏を持つ叙情的な旋律で父を失った悲しみを歌い、カデンツァで *c^{mo}* に達する [本日の演奏はここまで]。ここでのレシタティブとエールはイタリア時代にロッシェーニが完成したシェーナとアリアの構造とは異なり、劇的な朗唱から自然なアリオソへの移行により、その後のグランドオペラの歌のひな型になった。

歌詞：[レシタティブ] 私を見捨てないでくれ、復讐の希望よ！ ギヨームは鎖に繋がれ、私の焦燥が戦いの時へと駆り立てる。だが、ここは何と静かなのだ！ 聞こえるのは自分の足音だけ…父は死んだ。私はここに戻ることはない。[エール] 私がこの世に生を受けた、先祖伝来の住処よ！ お前は昨日まで、愛する父を庇護してくれた。私はむなしく呼ぶ、つらい悲しみに！ 父の愛しい家、私はこれが最後と思ってお前を見に来たのだ！

◎セーヌ(アルノール、この絶望はどこから生まれたのでしょうか? (*Arnold, d'où naît ce désespoir?*)と、マティルデのエール〈私たちの愛には、もう希望がありません (*Pour notre amour plus d'espérance*)〉

第3幕冒頭 (第13曲)、舞台はアルトドルフ宮殿の庭の礼拝堂。アレグロのパセティックな前奏に始まり、アルノールから父を殺されたと聞いたマティルデがショックを受ける (以上、セーヌ [シェーナ])。下手人がゲスレルと知った驚きで始まるエール [アリア] の前半部では、マティルデの絶望がアレグロ・アジタートのパセティックな伴奏にのせ、半音階の下降音型を交えた流麗なパッセージが

歌われる。モデラートに転じての後半部ではアルノールも関与して感情を高め、支配者側に立つ運命を嘆きながらも彼に逃げるよう促し、二人は別れる。

歌詞：私の人生は始まったばかりなのに、私たちの愛の希望は失われてしまいました、永遠に。ええ、アルノール、私の理性は乱れても、あなたの悲しみは判ります。あなたのお父上が奪われたのに、私はあなたとともに悲しむことすらできないのです。ああ、戦いの準備が告げられています。どうか逃げてください。[アルノール] 私が逃げる？ [アルノール/マティルデ] 私たちの愛を断念することで、それ以上のものを彼に与えるのです。さようなら！ 永遠に！

《オリー伯爵(Le Comte Ory)》(1828年)

題名 オリー伯爵(Le Comte Ory) 2幕のオペラ

台本 ウジェーヌ・スクリーブ(Eugène Scribe,1791-1861)及びシャルル＝ガスパール・ドレストル＝ポワルソン(Charles-Gaspard Delestre-Poirson [本名オギュスト＝シモン＝ジャン＝クリゾストム・ポワルソン Auguste-Simon-Jean-Chrysostome Poirson],1790-1859)。

初演 1828年8月20日、パリ、オペラ座 [王立音楽アカデミー劇場(サル・ル・ペルティエ)]

メモ 《ランスへの旅》に続いてパリで初演した2作(《コリントスの包囲》1826年と《モイーズ》1827年)が旧作のフランス語改作であることから、オペラ座は書き下ろしの新作を求めた。ロッシーニは題材にシラーの『ヴィルヘルム・テル』を検討したが、ポーロニヤに残した母の死(1827年2月20日)の悲しみから立ち直れず、つなぎとして3年前に初演した《ランスへの旅》を再使用して《オリー伯爵》を完成させた。物語は、隠者に扮して女伯爵アデルの誘惑を試みて失敗したオリー伯爵が、仲間と共に女巡礼に変装して夜這いを試みて失敗する馬鹿馬鹿しい内容だが、「音楽に新しいスタイルと斬新な切り口があり、聴き手をシャンパンの泡のように沸き立たせ」、フランス語の喜歌劇に新境地を拓く傑作と認められた。



◎オリー伯爵、イゾリエ、女伯爵アデルの三重唱(この暗い夜の助けで(A la faveur de cette nuit obscure))

第2幕クライマックスをなす、オリー伯爵、イゾリエ、女伯爵アデルの長大な三重唱(第11曲。《オリー伯爵》のための書き下ろし)。舞台は女伯爵アデルの寝室。オリーが忍んで来ると予期し、アデルと彼女に恋するオリーの小姓イゾリエ(男装役)が待ち構えている。そこに修道女コレットと称するオリーが現れて求愛するが、相手がヴェールをかぶった小姓と気づかない。アデルは声だけで応じ、イゾリエは女伯爵に愛情を示して彼女を困惑させる。やがてラッパの音が聞こえ、城の男たちの遠征からの帰還を知ったアデルとイゾリエは安堵し、オリーは敗北を悟る。この三重唱の音楽と声の豊かな官能性は他に例が無く、ロッシーニに批判的なベルリオーズも「天才の所産」と絶賛した。

歌詞：[オリー] 暗い夜を幸い、前進しよう。愛と期待に胸が高鳴る。夜と静寂が私の見方だ。[イゾリエ] 不安と期待にぼくの胸が高鳴る。[アデル] 不安と希望に胸の高鳴りを感じます。[イゾリエ] さあ、彼に話しかけて [アデル] そこにいるのはどなた？ [オリー] 尼僧コレットにございます。あなたのおそばに行くのをお許しください。[アデル/イゾリエ] ああ！ なんて不実な！ [オリー] (イゾリエの手をとって) 私に恐怖はありません！ その手をこの胸に当てさえずれば。[アデル] その手をお放しください……
(ラッパの音がする) [アデル/イゾリエ] ラッパが鳴りました。これで恐れも心配もありません。[オリー] ラッパが聞こえた。どんな危険が迫っているのか？ おれはこの魅惑から去らねばならぬというのか？

日本ロッシーニ協会 Societ  Rossiniana Giapponese

日本ロッシーニ協会は、ロッシーニを愛する音楽研究者、評論家、声楽家、演奏家、オペラ愛好家によって1995年12月に設立された団体です(名誉会長:フィリップ・ゴセト、会長:水谷彰良、事務局長:金井紀子)。定期演奏会と例会の開催、研究紀要『ロッシニアーナ』の発行を主な事業とし、ロッシーニに関心のある方はどなたでも入会できます。入会資料請求は事務局まで(Fax:03-3722-0426)。
[公式ホームページ] <http://societarossiniana.jp/>





日本ロッシェニ協会
Società Rossiniana Giapponese

日本ロッシェニ協会について

日本ロッシェニ協会 (Società Rossiniana Giapponese) は、ロッシェニとその作品の世界的規模の再評価、研究の飛躍的發展に鑑み、これを学問的に継承し、日本における研究・批評・著述・演奏にさまざまな角度から貢献することを目的に設立されました (1995 年 12 月)。名誉会長に 19 世紀イタリア・オペラの文献学的批判考証の世界的権威フィリップ・ゴセット教授 (ロッシェニ全集及びヴェルディ全集編纂最高責任者) を迎え、研究者と演奏家の相互協力、諸団体との交流を通じてロッシェニ復興の一翼を担うべく活動を続けております。

【主な活動と事業】

研究紀要『ロッシェニアーナ』発行 (既刊 35 号)、会報「ガゼッタ」 (メールマガジン。月 3 回配信)

定期演奏会の開催、例会の開催 (年 6 回)

協会公式ホームページ <http://societarossiniana.jp/>

後援 (ロッシェニ普及に寄与すると認められる上演、演奏会、イベントへの後援と協力)

国際協力 (海外の団体・研究者との交流、資料と情報の提供)

【組織】

名誉会長：フィリップ・ゴセット (Philip Gossett) 顧問：高崎保男 会長：水谷彰良 事務局長：金井紀子

運営委員：朝岡聡 天羽明恵 家田紀子 小畑恒夫 小山陽二郎 阪口直子 村上光一 + 前記役員 (50 音順)

会員：一般会員及び本協会の活動を後援する個人／団体の特別会員

連絡先：日本ロッシェニ協会事務局 158-0085 東京都 世田谷区 玉川田園調布 1-11-11-102

TEL 03-3721-2084 FAX 03-3722-0426 e-mail akira642@mb.infoweb.ne.jp

会員随時募集中 (ロッシェニに関心のある方はどなたでも入会できます)

年会費：一般会員 1 万円 特別会員 3 万円 入会資料は上記事務局までファクス又はメールでお求めください。